

メアリ・フランセス・デュランテーニ著

「17世紀オランダ絵画における子供」

アン・アーバー・1983

UM リサーチ出版

堤 委 子

読み終ってさわやかな本である。一冊の本を価値あるものにするその魅力は種々あるだろうが、本書の場合、問題にとりくんだ著者の姿勢がそうさせている。

著者は、「十七世紀オランダ絵画における子供」という問題を思い入れぬきに、距離を置きつつ丁寧に誠実に解き明かしていく。個々の解釈については、その妥当性に疑問も残ろうが、美術史研究がある問題に関する著者の見解表明と考えれば、われわれはまず耳を傾ける必要があるだろう。

本書はまた子供の登場する絵画にしぼることで、とかくレンブラントのみによって代表されがちな十七世紀オランダ絵画のもう一つの側面を紹介することにもなっている。聖書や神話の物語が絵画化される一方で、当時の人々の日常生活が次々と画面にのせられていったのである。ここでは「家庭内の諸相」「子供と学校教育」「遊ぶ子供」という章だてで、百六十点以上の図版が挙げられているが、その中に泣いたり笑ったり、今も変わらぬ子供たちの姿を眺めるだけでも楽しい。ただそういった一

見何でもない描写の中に、寓意や教訓、諺が意識的にもりこまれていることが解き明かされていくのである。その意味では、大方の場合、子供たちは主役というよりも、絵の主題を語るための一モチーフに過ぎないのだが、家で子を叱る場面はあっても叩く場面はなく、悪さをする子供たちの傍には、必ずその原因となった大人たちの愚行が描かれ、なお子供たちへ寄せる当時の人々の気持ちを感じられてほほえましい。

さて、本書は英文で翻訳もまだ出されていないようであるから、個々の内容についても簡単に紹介するのが適切かと思われる。

まず絵を見てみよう。一組の母子と若い女が描かれている。(図1) 母親は乳をやるうとしているが、子の注意は頭上のがらがらに向けられている。乳を飲むことは体のみならず心の成長にとっても欠かせなかった。母乳を通じて道徳をも吸い込むと考えられていたからである。一方がらがらは、当時の寓意書中で、世俗的喜悦の

象徴として扱われていた。したがってこの絵は単なる情景描写ではない。すなわち、この子供は乳を吸わずおもちゃに心引かれ、徳ではなく享樂への道を選んでいるのである。

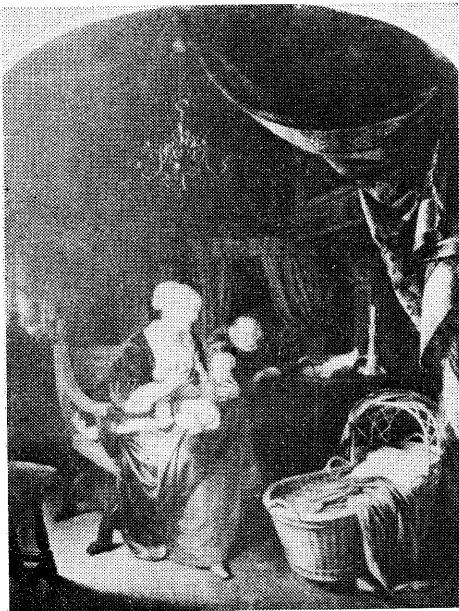
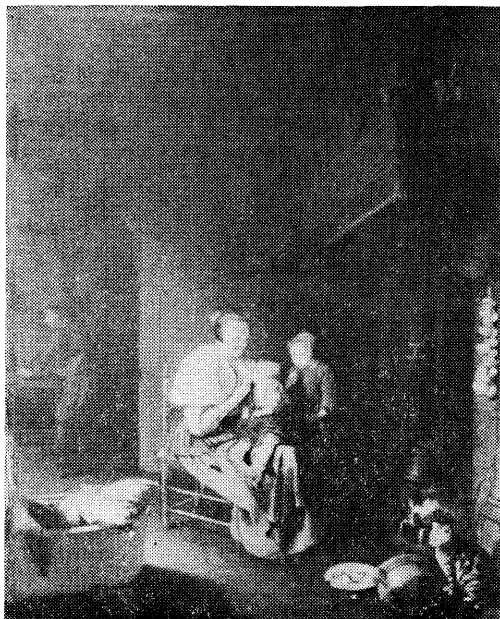


図1・ダウ「若い母親」

ベルリン国立絵画館

図2・ダウ「大工の家族」

バッキンガム宮殿



もう一枚似た絵をあげよう。(図2)画面中央に母子、傍に少女が立っている。今度は赤ん坊は、乳を一心に飲んでゐる。つかの間の喜びにまどわされず、正しい道を

選んだのである。左奥に見える隣の部屋では、父親が大工仕事に励んでいる。大工の父親と言えば聖家族が連想されるが、ここではむしろ諺、「大工が器用なほど木端も多い」(子は親に似るもの)に関係しているらしい。手前では猫が傾いた壺や皿を前におとなしくしている。親を中心によく治められた平和な家庭が描かれている。しばらくすると離乳食に切り換わる。母は匙を差し出

図3・ブレケランカム「母と子」

アムステルダム国立美術館





図4・「与えられたものを喜んで受けよ」

ダニーソス・クラメリ

オクトギンタ・新道德寓意図像集」

フランクフルト, 1630.

し、子は口を開け待っている。(図3)は子供が嫌がって泣いたり顔をそむけたりしている例も見られる。これらはいずれも「粥を差し出されたら口を大きく開けよ、さもないと後で何ももらえない」という諺によっている。つまり、粥も有難く受けければ、後でもっとよい御馳走が与えられよう、という訳である。当時のクラメリの寓意書では、神の恩寵もこの諺のとおりと記述され、子



図5・ダウ「窓辺の女中」

ロッテルダム・ボイアンス・ブニンゲン美術館

の食べる粥のおこぼれを喜ぶ犬たちの絵がつけられている。(図4)

いよいよ子供たちは食卓につく。絵では食前の祈りが



図6・ステーン
「食事時の農民一家」

ロンドン・ナショナル・ギャラリー

テーマとなる。「窓辺の女中」(図5)では、水差しを空ける女が大きく描かれ、左手奥に母と子がいる。母はパンをナイフで切り分け、少年は両手を合わせている。この手前の女は、壺がどんな液体でも最初に注がれたものを容れるように、子供も最初の影響が決定的である、という寓意書の文と絵とを受けている。また左手前の実なる植木が子の前途を示している。

祈りの情景が大きく描かれたものも多い。(図6)母

の給仕を少女が小さな手を合わせて待っている。が、祈りは形だけで、心は目の前の皿に配られる食物にのみ向いている。後の兄も祈るというよりは、単に準備を待っているという風情である。親たちも一時、手を休めるところとさえしない。床は散らかり、飼犬が鍋の縁を嘗めている。



図7・ステーン
「愉快な仲間」
(老人が歌えば若者が笛吹く)

アムステルダム国立美術館



図8・スーン

「めちゃくちゃな家庭」

ロンドン・ヴィクトリア・アルバート美術館

御馳走の場面も描かれる。大人たちの飲めや歌えの騒ぎに混じって、子供も煙草を吸ったり、器からラッパ飲みしたりしている。(図7) これは「老人が歌えば、若者が笛吹く」(子は親を真似るもの)という諺の絵画化である。この場面に「めちゃくちゃな家族」と題される作品が続く。(図8) 酔い潰れる女のポケットを子供た

ちが探っている。起きている男女は、自分たちに夢中で注意すらしない。例によって犬が皿から食べている。食卓に乗り食べる犬や、鳥籠に手を出す猫が描かれることもある。

これらは何のための集まりか確定できないが、ある特定の祝祭を描いたものに、「十二夜」、「聖ニコラス祭」などがあるステーンの描く「十二夜」を見てみよう。

(図9、次ページ) 前景で、おもちゃを一杯持った少女が、右手の女の招きに応ぜず逃げるような素振りを見せている。左では少年が泣いているが、昨年一年の行ないがよくなかったので、何ももらえなかったのである。少女は良い子だったのだろう。この兄妹に下された判断が妥当かどうか、われわれには知る術もない。が沢山のおもちゃをもらってなお見せるのさえ嫌がる少女は、少し甘やかされているようで、この絵も兄弟姉妹を分け隔てしないようにという当時の警告を思い出させるといふ。

以上数点に絞って紹介したが、本書では多くの作例が当時の寓意書他、書物や演劇の中の子供観、教育観を引

きつつ読み解かれていく。明かされる意味は、時に意外で、非常に興味深い。が、これらの光景はどれも日常生活を題材として、身近で親しみやすいものである。しかし、考えてみれば、今のわれわれはこれらの暮しから何と隔ってしまったことだろう。授乳も祈りもままならない。全員が揃って朝夕の食事ができる家庭がどれくらいあるだろうか。むしろ「老人が歌えば若者が笛吹く」の場面に近い毎日を送っているのかもしれない。こう思えば、本書で論じられた平和な情景そのものが、今のわれわれにとっての警告となっているような気がしてならないのである。

(人間文化研究科)



図9・ステーン
聖ニコラス祭

アムステルダム国立美術館